様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｈ０１３０３

研究課題名（和文）ブリティッシュ・ワールドの共通意識と紐帯に関する総合的歴史研究

研究課題名（英文）Comprehensive Historical Studies on Shared Consciousness and Imperial Ties in the British World

研究代表者
竹内　真人（TAKEUCHI, Mahito）

日本大学・商学部・教授

研究者番号：２０５２０７２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、イギリスとの①血縁・言語・宗教の共通性に基づくブリティッシュネスという感情的紐帯、②貿易・金融・生産構造に関連する経済的紐帯、③武器移転や軍事援助による軍事的紐帯の重層的関係と強度に注目しながら、イギリスの勢力圏としてのブリティッシュ・ワールドが現代のコモンウェルスにどのように変化してきたのかを歴史学的・総合的に解明することを試みたものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ブレグジット以後のイギリスはグローバル・ブリテン構想を掲げ、かつての自治植民地であったカナダ、オーストラリア、ニュージーランドとの紐帯を強化し、アメリカ合衆国との安全保障上の紐帯を強めながら、インド太平洋地域への関与を強めている。本研究の意義は、こうしたブリティッシュ・ワールドを支える紐帯がどの程度の強度を持ち、帝国主義といかなる関係を保ちながら歴史的に形成されてきたのかを総合的に解明できる点にある。

研究成果の概要（英文）：This study attempts to analyze historically and comprehensively how the British World as a sphere of influence has changed into the modern Commonwealth, by focusing on the multilayered relationship and intensity of (1) emotional ties of Britishness based on commonality of blood, language, and religion, (2) economic ties related to trade, finance, and production structures, and (3) military ties through arms transfers and military aid.

研究分野：イギリス帝国史

キーワード：イギリス帝国史　コモンウェルス　勢力圏　紐帯　共通意識

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

現代世界におけるイギリスのプレゼンスは、欧州連合からのイギリスの離脱（ブレグジット）によって大きく変化し、コモンウェルスとの関係強化も予想されるようになってきた。こうしたブレグジット後のナショナル・アイデンティティに揺れる現代イギリスを新たに照射するために、本研究は、ジョセフ・Ｓ・ナイが『スマート・パワー』（日本経済新聞出版社、2011 年）で提示した文化的な「ソフト・パワー」と経済的・軍事的な力である「ハード・パワー」の関係に注目し、イギリスとの①血縁・言語・宗教の共通性に基づくブリティッシュネスという感情的紐帯、②貿易・金融・生産構造に関連する経済的紐帯、③武器移転や軍事援助による軍事的紐帯の諸相を歴史学的に解明し、ブリティッシュ・ワールドの形成とそのコモンウェルスへの歴史的変化を解明することを課題とした。我が国では既に、感情的紐帯について木畑洋一編著『大英帝国と帝国意識』（ミネルヴァ書房、1998 年）が、そしてコモンウェルスについては山本正・細川道久編著『コモンウェルスとは何か』（ミネルヴァ書房、2014 年）があるが、感情的・経済的・軍事的紐帯の関係に注目しながらイギリスの勢力圏の変容を明らかにしたものではなかった。一方、英語圏においては、Carl Bridge and Kent Fedorowich (eds.), *The British World* (London, 2003)が「狭義のブリティッシュ・ワールド」論を唱え、イギリス移民によって建設され、イギリス本国の人々と「ブリティッシュネス」という感情的紐帯を共有した自治植民地（カナダ、オーストラリア、ニュージーランド）を「ブリティッシュ・ワールド」と捉えた。また、Gary B. Magee and Andrew S. Thompson, *Empire and Globalisation* (Cambridge, 2010) と James Belich, *Replenishing the Earth* (Oxford, 2009) は「広義のブリティッシュ・ワールド」論を主張し、自治植民地とアメリカ合衆国からなるアングロ・ワールドを「ブリティッシュ・ワールド」と捉えた。そして John Darwin, *The Empire Project* (Cambridge, 2009) は「最広義のブリティッシュ・ワールド」論を提唱し、自治植民地だけでなく、イギリス帝国の属領（特にインド）や「非公式帝国」（中国やラテンアメリカ）を含む「ブリティッシュ・ワールド」の存在を強調した。竹内真人編著『ブリティッシュ・ワールド―帝国紐帯の諸相―』（日本経済評論社、2019 年）では、この最広義のブリティッシュ・ワールドを分析対象として紐帯の諸相を解明したが、そのコモンウェルスへの変容や紐帯の強度と持続の度合いについては未だに分析が不十分であったため、本研究ではこうした点の分析を深め、研究成果をさらに総合的に発展させることを試みた。

２．研究の目的

本研究の目的は、ブリティッシュ・ワールドの形成・変化と、現代コモンウェルスへの変容、そしてコモンウェルスを支える紐帯の強度を解明することであり、その目的を達成するために、以下３つの課題を追究した。第１課題は、感情的紐帯の分析であり、植民地における宣教活動、アイルランドとのユニオニズム、時間規律の普及、コモンウェルス構想、インド人行政官のブリティッシュネス等を取り上げた。第２課題は、経済的紐帯の分析であり、イギリスとカナダの帝国特恵関税論争、コモンウェルス商業会議所の活動、アジア人移民政策、イギリスとオーストラレーシアの貿易等を取り上げた。第３課題は、軍事的紐帯の分析であり、帝国防衛、冷戦期イギリスの対南アジア軍事援助政策、独立後インドの軍事的自立化等を取り上げた。

３．研究の方法

本研究では、ブリティッシュ・ワールドを支えた３つの紐帯（具体的には、①感情的紐帯、②経済的紐帯、③軍事的紐帯）の重層的関係と変化を解明する方法を採り、イギリスの勢力圏はいかなる紐帯によって構成され、現代のコモンウェルスへと変化してきたのか、また現代のコモンウェルス諸国を結合している紐帯は、いかなる歴史的経緯で形成され、どの程度の強度を保持しているのか、という「問い」に答えることを試みた。その際、特に「ソフト・パワー」と「ハード・パワー」の関係に注目し、ブリティッシュ・ワールドの変容を動態的に把握することや、コモンウェルス諸国を結び付けている紐帯の強度を総合的に解明することを試みた。

４．研究成果

本研究では、当初、令和２年度～令和３年度に、海外の公文書館・図書館で未公刊一次史料を調査し、海外研究協力者を招聘して国際セミナーを開催することを予定していたが、新型コロナウイルス感染症の世界的流行によってその実施が不可能となり、研究課題の進捗状況に大幅な遅れが生じた。令和４年度になってようやく、新型コロナウイルス感染症が収束に向かったため、研究の遅れを取り戻すべく、海外の公文書館・図書館で未公刊一次史料の調査を開始したが、未公刊一次史料の収集ができた場合であっても、時間的制約から収集した未公刊一次史料の読解や分析が十分にできなかったり、研究が既公刊の二次文献やマイクロフィルムやデータベース、その他オンラインで入手可能な史料調査に留まったりする状況は続いた。

そのような状況下で、本研究の研究代表者・研究分担者・海外研究協力者は相互に連絡を取り合いながら研究を進め、その研究成果を発表したが、本研究課題と関わる主な研究成果は以下の

通りであった。

（1）令和３年 11 月 21 日に西洋史研究会 2021 年度大会共通論題報告が「ブリティッシュ・ワールド―帝国紐帯とアイデンティティ―」という論題でオンライン（Zoom）形式で開催され、その内容が翌年の『西洋史研究』新輯第 51 号（2022 年）に掲載された。具体的には、研究代表者の竹内真人による「趣旨説明」に続いて、まず研究分担者の松永友有が「チェンバレンの、チェンバレンによる、カナダのための計画？―二つの帝国特恵システムとイギリス関税改革運動の帝国ヴィジョン―」と題する報告を行い、イギリス本国側の植民地担当大臣ジョゼフ・チェンバレンの関税改革運動が、帝国統合という大目的を達成するためにカナダの自治植民地側に一方的に有利な政策を推進するものであった点を解明した。続いて研究分担者の福士純が「1911 年米加互恵協定とカナダ・ナショナリズム」と題する報告でカナダ自由党のウィルフリッド・ローリエが率いる自由党政権が崩壊する要因となった 1911 年米加互恵協定をめぐる論争を分析し、カナダ保守党やカナダ国民連盟が行った米加互恵協定に対する反対が、イギリス本国や他のドミニオン間で共有されたブリティッシュネスという感情的紐帯を守る観点から行われた点を解明した。最後に、研究分担者の石橋悠人が「イギリス帝国とグリニッジ世界標準時の形成―19 世紀末における本初子午線と時間帯の受容を中心に―」と題する報告を行い、イギリス本国とその植民地の科学技術者たちが、国際社会に共通の時間・空間の基盤としてのグリニッジ本初子午線の受容にどのように関与したかを究明した。その後、研究分担者の渡辺昭一と勝田俊輔の司会の下、東京大学・成城大学名誉教授の木畑洋一と研究分担者の小川浩之がコメンテーターとして報告し、フロアの参加者を交えて活発な討論が展開された。

（2）令和５年９月３日に開催された明治大学国際武器移転史研究所第 10 回研究セミナーにおいて、研究代表者の竹内真人が「『ブリティッシュ・ワールド―帝国紐帯の諸相―』を超えて―紐帯をめぐる駆け引きと「白人性」―」と題する報告を行い、竹内真人編著『ブリティッシュ・ワールド』を超える研究の方向性を明らかにした。本報告では、まず本研究の現代的意義を明らかにするために、ブレグジット以後の国際情勢を俯瞰した。具体的には、①カンザック（CANZUK）諸国（カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、イギリス）の紐帯強化、②カンザック諸国とアメリカ合衆国によるファイヴ・アイズという諜報・安全保障同盟や米英豪安全保障協力（AUKUS）、そして日米豪印戦略対話（QUAD）のような安全保障分野における協力強化、③「アングロ圏（Anglosphere）」という概念に対する国際的な注目の高まり（アングロ圏は、カンザック諸国とアメリカ合衆国を中核とするが、かつてのイギリス帝国の一部であったインド、シンガポール、香港、そしてアフリカや西インド諸島の英語使用諸国及びアイルランドを含むこともあり、論争の的となっている）、④再びインド太平洋地域に関与するイギリスのグローバル・ブリテン構想、⑤環太平洋パートナーシップ協定（TPP）や環太平洋パートナーシップに関する包括的及び先進的な協定（CPTTP）のようなアングロ圏の中核諸国（カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、イギリス）が参加する自由貿易協定の存在、及びそれに代わるものとしてアメリカ合衆国のジョー・バイデン大統領が呼びかけたインド太平洋経済枠組み（IPEF）の存在、⑥英米の特別な関係の存在と脆さ（例えば、トランプ政権の「アメリカ第一主義（アメリカ・ファースト）」）、⑦中国・ロシア対アングロ圏を中核とする民主主義諸国という「新冷戦」の構図、⑧アングロ圏の中核諸国と「志を同じくする（like-minded）」アジアの民主主義国家としての日本というスタンスと「自由で開かれたインド太平洋構想」、⑨日本もアングロ圏も過去の帝国主義の負の遺産に対して反省する必要性があることを指摘した。その上で、上述の西洋史研究会 2021 年度大会共通論題報告とその後の討論で示された諸批判を踏まえた研究の方向性を提示した。具体的には、①感情的・経済的・軍事的紐帯の重層的関係に注目して分析するが、竹内真人編著『ブリティッシュ・ワールド』で示した「紐帯とは、ブリティッシュ・ワールド内での共通性を創出する広義の権力作用」という点をより明確にするため、紐帯をめぐる駆け引き（コンフリクトやダイナミズム）を強調する、②英米間の特別な関係や駆け引きに注目する、③「ブリティッシュネス」の人種主義・人種差別的側面や「ブリティッシュネス」と「白人性（Whiteness）」との関係について批判的に分析し、帝国統合のイデオロギーとしての「ブリティッシュネス」の役割を考察する、④「新しいイギリス帝国史（ポストコロニアル研究）」と「古いイギリス史（実証研究）」のコラボの可能性を探究するという方向性を提示した。

（3）研究代表者と研究分担者それぞれが本研究課題と関連する以下の研究テーマについて一次史料の収集・分析や研究発表を行った。研究代表者の竹内真人は、ニュージーランドのイギリス宣教活動に関する未公刊一次史料をニュージーランド国立図書館で収集し、福音普及協会（Society for the Propagation of the Gospel）のマイクロフィルム文書を分析すると共に、アングロ圏構想の歴史的系譜に関する論文を令和４年度に発表した。勝田俊輔は、Queen Victoria Journals（電子データベース）を用いて、アイルランド総督を廃止して王太子を副王としてアイルランドに派遣する計画を中心に、ヴィクトリア女王のアイルランド認識・政策を検討した。石橋悠人はオーストラリアのメルボルン天文台に関する一次史料を分析し、植民地世界における天文学・測量・気象観測の実践と植民地統治の関係を考察した。馬路智仁はブリティッシュ・ワールドの「周縁」とも言える南太平洋におけるポストコロニアル思想を探究した。松永友有は、第一次大戦以前のジョゼフ・チェンバレンの関税改革運動やイギリス保守党の有力政治

家レオポルド・エイマリの言論活動を取り上げて、イギリス帝国統合を目指す帝国主義とイギリス本国本位のナショナリズムが明らかに乖離した事例について考察した。福士純は 1911 年米加互恵協定をめぐる論争についての検討を継続し、イギリスとカナダでの史料調査で収集した英加の帝国主義者の書簡・刊行物を分析した。小川浩之は、1955 年６月にイギリスと南アフリカの間で締結されたサイモンズタウン協定を取り上げ、イギリスと南アフリカ間の軍事的紐帯の変容を考察した。渡辺昭一は、第二次世界大戦後のイギリスの対南アジア軍事援助政策を概観しながら、南アジア最大の攪乱要因であったインド・パキスタンの対立関係が、中印紛争（1962 年）勃発の際、いかなる関係に変容したのかを検討した。横井勝彦は、「軍事同盟・安全保障体制」・「軍事ロジスティクス」・「軍産複合体」等に注目して英印間の軍事的紐帯の研究を「軍拡の負の連鎖」の研究へと展開した。また、海外研究協力者のアンドリュー・ディリ―とレイチェル・ブライトとフェリシティ・バーンズは令和２年度に本研究課題と関連する英語論文を明治大学国際武器移転史研究所編『国際武器移転史』第 10 号に発表し（Andrew Dilley, ‘Economic Governance in the Empire-Commonwealth in Theory and in Practice, c.1887-1975’; Rachel Bright, ‘Migration, Naturalisation, and the ‘British’ World, c.1900-1920’; Felicity Barnes, ‘The Importance of Being ‘British’? Australia, Canada, New Zealand and the Cultural Economy of Empire in the Interwar Era’)、海外研究協力者のアパラジス・ラムナスも令和３年度にインドの技術者・行政官・テクノクラートであった Sir M. Visvesvaraya のブリティッシュネスに関する英語論文を執筆した（Aparajith Ramnath, ‘‘Dominion Status’ and the Evolution of ‘Imperial Citizenship’ in Interwar India’)。現在、これらの海外研究協力者が執筆した英語論文を日本語に翻訳する作業を行っている。

今後の展望としては、海外研究協力者が執筆した英語論文の日本語への翻訳を進めると共に、研究代表者と研究分担者が各自で一次史料の読解や分析を継続し、その研究成果を論集として 2025 年度末に出版することを予定している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計33件（うち査読付論文　13件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　11件）

１．著者名 竹内真人	４．巻 第39号
２．論文標題 アングロ圏構想の系譜	５．発行年 2023年
３．雑誌名 商学研究	６．最初と最後の頁 29-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 竹内真人	４．巻 第51号
２．論文標題 趣旨説明（2021年度大会共通論題報告 ブリティッシュ・ワールド―帝国紐帯とアイデンティティ―）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 西洋史研究（新輯）	６．最初と最後の頁 102-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松永友有	４．巻 第51号
２．論文標題 チェンバレンの、チェンバレンによる、カナダのための計画？二つの帝国特恵システムとイギリス関税改革運動の帝国ヴィジョン（2021年度大会共通論題報告 ブリティッシュ・ワールド―帝国紐帯とアイデンティティ―）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 西洋史研究（新輯）	６．最初と最後の頁 104-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 福士純	４．巻 第51号
２．論文標題 1911年米加互恵協定とカナダ・ナショナリズム（2021年度大会共通論題報告 ブリティッシュ・ワールド―帝国紐帯とアイデンティティ―）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 西洋史研究（新輯）	６．最初と最後の頁 119-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Tomohito Baji	4．巻 online first
2．論文標題 An Apex of the Racialization of the World	5．発行年 2023年
3．雑誌名 International Politics	6．最初と最後の頁 online first
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1057/s41311-023-00441-z	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石橋悠人	4．巻 第51号
2．論文標題 イギリス帝国とグリニッジ世界標準時の形成ー19世紀末における本初子午線と時間帯の受容を中心にー（2021年度大会共通論題報告 ブリティッシュ・ワールド―帝国紐帯とアイデンティティ―）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 西洋史研究（新輯）	6．最初と最後の頁 134-147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小川浩之	4．巻 第51号
2．論文標題 コメント（２）ブリティッシュ・ワールドの批判的再検討に向けて（2021年度大会共通論題報告 ブリティッシュ・ワールド―帝国紐帯とアイデンティティ―）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 西洋史研究（新輯）	6．最初と最後の頁 154-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 渡辺昭一	4．巻 第51号
2．論文標題 開会の辞（2021年度大会共通論題報告 ブリティッシュ・ワールド―帝国紐帯とアイデンティティ―）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 西洋史研究（新輯）	6．最初と最後の頁 100-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 渡辺昭一	4．巻 67号
2．論文標題 ケネディ政権の「危うい」パキスタン外交―1961年7月ケネディとアユーブ・ハーンの首脳会談をめぐって―	5．発行年 2023年
3．雑誌名 歴史と文化（東北学院大学論集）	6．最初と最後の頁 63-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Tomoari Matsunaga	4．巻 50
2．論文標題 Reconsidering the Tariff Reform Controversy in Britain	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Journal of European Economic History	6．最初と最後の頁 71-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 福士　純	4．巻 第12号
2．論文標題 ブリティッシュ・コモンウェルス航空訓練計画と航空機供給問題	5．発行年 2021年
3．雑誌名 国際武器移転史（明治大学国際武器移転史研究所編）	6．最初と最後の頁 29-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松永　友有	4．巻 第11号
2．論文標題 1902年植民地会議における帝国海軍同盟構想と帝国通商同盟構想	5．発行年 2021年
3．雑誌名 国際武器移転史（明治大学国際武器移転史研究所編）	6．最初と最後の頁 81-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小川　浩之	4．巻 48（第4号）
2．論文標題 EU離脱とイギリスの安全保障：「内部からの脅威」としてのポピュリズムと欧州懐疑主義	5．発行年 2021年
3．雑誌名 国際安全保障	6．最初と最後の頁 39-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.57292/kokusaianzenhosho.48.4_39	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 渡辺　昭一	4．巻 第22号
2．論文標題 南アジアの遅れた冷戦とケネディ・ネルー会談	5．発行年 2021年
3．雑誌名 ヨーロッパ文化史研究	6．最初と最後の頁 3-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 横井　勝彦	4．巻 第22号
2．論文標題 冷戦期南アジアの軍事的自立化に関する比較経済史研究	5．発行年 2021年
3．雑誌名 ヨーロッパ文化史研究	6．最初と最後の頁 39-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Andrew Dilley	4．巻 第10号
2．論文標題 Economic Governance in the Empire-Commonwealth in Theory and in Practice, c.1887-1975	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国際武器移転史（明治大学国際武器移転史研究所編）	6．最初と最後の頁 63-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Rachel Bright	4．巻 第10号
2．論文標題 Migration, Naturalisation, and the 'British' World, c.1900-1920	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国際武器移転史（明治大学国際武器移転史研究所編）	6．最初と最後の頁 27-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Felicity Barnes	4．巻 第10号
2．論文標題 The Importance of Being 'British'? Australia, Canada, New Zealand and the Cultural Economy of Empire in the Interwar Era	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国際武器移転史（明治大学国際武器移転史研究所編）	6．最初と最後の頁 45-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計28件（うち招待講演　3件／うち国際学会　7件）

1．発表者名 Hiroyuki Ogawa
2．発表標題 The UK-South Africa Security Relationship in the Era of Apartheid
3．学会等名 Human Rights Colloquium: A HSP Symposium (The University of Tokyo)（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 小川浩之
2．発表標題 ポスト・ブレグジットのイギリス政治外交―「脱地域連合」の可能性と限界―
3．学会等名 日本政治学会2022年度研究大会
4．発表年 2022年

１．発表者名 石橋　悠人
２．発表標題 時間の帝国：近代イギリス社会とグリニッジ標準時の形成
３．学会等名 愛知県立大学世界史セミナー
４．発表年 2021年

１．発表者名 馬路　智仁
２．発表標題 南洋と植民政策学：太平洋島嶼、人種（主義）、初期国際関係論
３．学会等名 日本政治学会（2021年度研究大会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 福士　純
２．発表標題 ブリティッシュ・コモンウェルス航空訓練計画とカナダにおける航空機供給
３．学会等名 社会経済史学会（中国四国部会2021年度大会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 竹内　真人
２．発表標題 趣旨説明 ブリティッシュ・ワールド：帝国紐帯とアイデンティティ
３．学会等名 西洋史研究会（2021年度大会共通論題）
４．発表年 2021年

１．発表者名 勝田　俊輔
２．発表標題 スコットランド史とアイルランド史：共通の視座の構築に向けて
３．学会等名 日本カレドニア学会（2020年度大会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 石橋　悠人
２．発表標題 グリニッジ世界標準時とイギリス帝国
３．学会等名 西洋史研究会（2021年度大会共通論題）
４．発表年 2021年

１．発表者名 松永　友有
２．発表標題 チェンバレンの、チェンバレンによる、カナダのための計画？：二つの帝国特恵システムとイギリス関税改革運動の帝国ヴィジョン
３．学会等名 西洋史研究会（2021年度大会共通論題）
４．発表年 2021年

１．発表者名 福士　純
２．発表標題 1911年米加互恵協定とカナダ・ナショナリズム
３．学会等名 西洋史研究会（2021年度大会共通論題）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Hiroyuki Ogawa
２．発表標題 The Simonstown Agreement and the Transformation of Maritime Order in the Indian Ocean, 1955-1975
３．学会等名 Maritime Order Workshop（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 小川　浩之
２．発表標題 ブリティッシュ・ワールド：帝国紐帯とアイデンティティ 論点開示
３．学会等名 西洋史研究会（2021年度大会共通論題）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計20件

１．著者名 縄田 雄二、小山 憲司	４．発行年 2023年
２．出版社 中央大学出版部	５．総ページ数 278
３．書名 グローバル文化史の試み（石橋悠人が「ジョージ・エアリとグリニッジ天文台アーカイブズの形成」を分担執筆）	

１．著者名 日本国際問題研究所「米中覇権競争下の日欧連携」研究会編著（遠藤乾編著）	４．発行年 2023年
２．出版社 公益財団法人　日本国際問題研究所	５．総ページ数 167
３．書名 戦禍のヨーロッパ―日欧関係はどうあるべきか―（小川浩之が「ブレグジット後のイギリス」を分担執筆）	

１．著者名 横井　勝彦	４．発行年 2022年
２．出版社 日本経済評論社	５．総ページ数 334
３．書名 国際武器移転の社会経済史	

１．著者名 大野　誠	４．発行年 2021年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 320
３．書名 近代イギリス科学の社会史（石橋悠人が「海軍の科学研究体制：時間と空間の科学」を分担執筆）	

１．著者名 Tomohito Baji	４．発行年 2021年
２．出版社 Palgrave Macmillan	５．総ページ数 232
３．書名 The International Thought of Alfred Zimmern: Classicism, Zionism and the Shadow of Commonwealth	

１．著者名 横井勝彦、白戸伸一、山下雄司、アパラジス・ラムナス、須藤功、下斗米秀之、渡辺昭一、劉復國、ソン・キョンホ、纐纈厚	４．発行年 2021年
２．出版社 日本経済評論社	５．総ページ数 368
３．書名 冷戦期アジアの軍事と援助	

〔産業財産権〕

〔その他〕

令和３年度に海外研究協力者のアパラジス・ラムナスがインドの技術者・行政官・テクノクラートであったSir M. Visvesvarayaのブリティッシュネスに関する英語論文を執筆した（Aparajith Ramnath, ‘‘Dominion Status’and the Evolution of ‘Imperial Citizenship’ in Interwar India’）。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	勝田　俊輔 (KATSUTA Shunsuke) (00313180)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授 (12601)	
研究分担者	石橋　悠人 (ISHIBASHI Yuto) (90724196)	中央大学・文学部・教授 (32641)	
研究分担者	馬路　智仁 (BAJI Tomohito) (80779257)	東京大学・大学院総合文化研究科・准教授 (12601)	
研究分担者	松永　友有 (MATSUNAGA Tomoari) (50334082)	横浜国立大学・大学院国際社会科学研究院・教授 (12701)	
研究分担者	福士　純 (FUKUSHI Jun) (60600947)	東京経済大学・経済学部・教授 (32649)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小川　浩之 (OGAWA Hiroyuki) (60362555)	東京大学・大学院情報学環・学際情報学府・教授 (12601)	
研究分担者	渡辺　昭一 (WATANABE Shoichi) (70182920)	東北学院大学・文学部・教授 (31302)	
研究分担者	横井　勝彦 (YOKOI Katsuhiko) (10201849)	明治大学・研究・知財戦略機構（駿河台）・研究推進員（客員研究員） (32682)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	ディリー　アンドリュー (DILLEY Andrew)	アバディーン大学（英国）・神学・歴史学・哲学部・准教授	
研究協力者	ブライト　レイチェル (BRIGHT Rachel)	キール大学（英国）・人文学部歴史学科・准教授	
研究協力者	バーンズ　フェリシティ (BARNES Felicity)	オークランド大学（ニュージーランド）・文学部歴史学科・准教授	
研究協力者	ラムナス　アパラジス (RAMNATH Aparajith)	アーメダバード大学（インド）・文理学部・准教授	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
英国	アバディーン大学	キール大学		
ニュージーランド	オークランド大学			
インド	アーメダバード大学			